

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

高岳親王とマレーシア

信田敏宏 (国立民族学博物館教授)



高岳親王の供养塔 (筆者撮影)

数年前、とある財団が企画したマレーシア研修ツアーに講師として同行した時のことだった。ツアー客の1人から「日本と縁のある場所に行きたい」という希望が出され、財団関係者が調べたところ、高岳親王(たかおかしんのう)の話が出てきた。かくして一行は、ジョホール州ジョホールバルの日本人墓地にある高岳親王の墓に行くことになったのである。

高岳親王は、平安時代初期の皇族であり、僧侶であった。延暦18年(799年)に、平城天皇の第三皇子として生まれた。平安京を開いた桓武天皇の孫に当たる。その後、出家して真如と名乗り、空海の弟子として修業し、高野山に親王院を開いた。貞観3年(861年)62歳の時に唐の長安を目指し、日本を出発。3年後の貞観6年(864年)長安に到着するが、優れた師に出会えず、翌年、広州より海路で天竺を目指した。しかしその後、消息を絶ち、マレー半島の南端で亡くなったと伝えられている。一説によれば、虎に襲われ命を落としたとされている。

高岳親王の入唐および航海の様子については、マルキ・ド・サドの小説の訳者として知られる澁澤龍彦の遺作となった『高岳親王航海記』(1987年)に詳しく書かれているので、興味のある方は読んでいただきたい。

戦前の日本では、高岳親王の名は教科書にも出てくるほど、よく知られた存在であったらしい。南方に進出する日本軍にとって、山田長政と共に、日本の南方

進出の象徴として宣伝されたからである。しかし戦後、上記の澁澤作品によって取り上げられるまで、その存在は忘れ去られていた。

さて、ジョホールバルを訪れたツアーの一行は、早速、日本人墓地に向かった。車が行き交う道路沿いに日本人墓地はあった。事前に許可を得ていた私たちは、フェンスに囲まれた墓地の敷地に入り、しばし散策した。草地の中には数十の小さな墓が立ち並んでおり、なかには芝生がレンガ石で区切られただけの墓もあった。その墓地で、ひときわ目を引いたのが、高岳親王の墓だった(写真参照)。ずいぶん前に亡くなった人なので、墓も朽ち果てていて、見つけるのが難しいのではないかと心配していたが、想像していたものとは違って、実に立派な墓が立っていたのである。聞けば、近年になって、高野山の親王院が新たに建立したのだという。

高岳親王がマレーシアで亡くなったという話は「伝説」にすぎないのかもしれない。しかし、その伝説の作用かどうかは分からないが、それまで何度か訪れていたジョホールバルの見慣れた景色が何か違って見える気がした。今から千年以上も前に日本から遠く離れたこの地で命を落とした高岳親王に思いを馳せながら、自然と墓に手を合わせた。

< 筆者紹介 >

1968年、東京都生まれ。東京都立大学(現・首都大学東京)大学院社会科学研究所博士課程満期退学。博士(社会人類学)。東京都立大学人文学部助手、国立民族学博物館助手、同博物館准教授を経て現職。専門は社会人類学。開発、イスラーム化、エスニシティなどをテーマに、マレーシア先住民オラン・アスリを対象とした人類学的研究を行なっている。著書に『周縁を生きる人びと オラン・アスリの開発とイスラーム化』(2004年、京都大学学術出版会)、『ドリアン王国探訪記 マレーシア先住民の生きる世界』(2013年、臨川書店)などがある。